# 第二講・第三講 ／ それでも大切な文章術

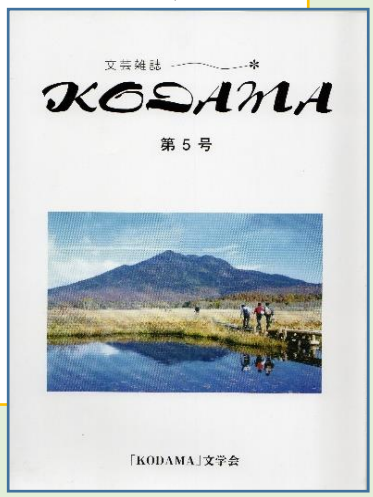
「他人の目を気にしないこと」ということは、内容においてのことであって、表現上は、あくまでも他人を意識しなければなりません。文章は、あらゆる表現も同じことですが、他人にわかってもらってこそ意味があります。たんなる独り言なら、何も文章にしなくてもよいのです。そこをしっかりおさえておきたいと思います。独り言にならないための文章術なのです。

とかく文章術というと、誤解している人が多いようですが、これを、名文を書くための術と考えてはなりません。名文や美文は断じて必要ありません。「名文を書く」ことへの憧れだけは捨てたいものです。「達意」という言葉がありますが、意味がよく通じることが第一であって、人を唸らせるような、いわゆる名文など書く必要はありません。

もし名文というものがあるとすれば、それは達意の文ということです。
名文とは、達意の文のことです。「これは何とうまい文章だろう」と思うことがあります。プロ、アマを問わず、思わずそう唸ってしまう文章はたしかにあります。それは、その人が、言うべきことを実に的確に表現しているからで、文字通り達意の文に私たちは感動するわけです。そういう文を書きたいのです。
そして、何でもそうですが、そのためには文章の基本をしっかり、意識して身につける必要があります。たとえてみれば、文章が家だとすれば、その建築術が文章術であるわけです。

建築術など知らなくても家は建つという人もいるように、文章術など不要という人もいるようです。しかし、住める家を建てるためにはやはり建築術が必要なように、達意の文章を書くためには、文章術はやはり必要です。そして、文章術は自ら生涯にわたり探求し、磨いていくものです。そのための基礎をお話します。

文芸雑誌 KODAMA（受講生分 31 冊）を永杉先生から寄贈いただいた。現在、KODAMA には、この教室の OB/OG５人が、同人として活躍しています。



**余録 1　新聞・雑誌のコラム・エッセイ・評論 、これはいいな、と思った文章を切り取っておいて、ていねいに読みかえすこと ― これも簡潔で分かりやすい文章を書く練習法の一つ。**

聞きました

歯切れの良い外山滋比古さん
が大好き。幅広いテーマにつ
り口は、どうやって思いつくのでし
佐賀市　福

## 英文学者　外山滋比古さん（92）

英文学者、そしてエッセイスト。代表作の「思考の整理学」（ちくま文庫）は200万部を超えた。滑空する姿は美しくても自力で飛び続けられない「グライダー人間」と、自力で飛べる「飛行機人間」の例えを用いて、自分の頭で考えることの大切さを説く。

「Reライフ」に質問を寄せてくれた福島さんは、読書ノートに気に入った外山さんのフレーズを書き留めている。その一つが「絵をかく人は文章がうまい」。なぜ、こんなことに気づけるのでしょう――その質問を、そのまま外山さんにぶつけた。

### 悩んで気づく

「ああ、これはねえ、文章をうまく書けなくて悩んでいたときに気づいたんです」と外山さん。

え、そんな悩みが？

「今も悩んでますよ」と外山さんは笑った後、こんな体験を語った。

1日10時間以上英語に浸る年月を経た後、日本語でものを書く必要性に迫られた。半世紀以上前のことだ。ところが、書けない。「英語に偏りすぎていた」。日本語に意識が向き、どうしたら文章をうまく書けるのだろう、との思いも芽生えた。

あるとき、新聞で何げなく目を通した漫画家のコラム。清水崑や横山泰三、那須良輔ら、「どの人も文章に切れ味がある。それを素通りしない。その中にあるおもしろさをと

まらない重みがあるという
「いろんな人と接すれば、

## 大竹しのぶ　まあいいか

ゆうべ、お風呂に入りながら、ふと、私はやはり母の娘であることを実感した。身体を洗う時のその手の動きや、首の角度、その時の自分の表情が、まだ今よりずっと若い時の母を彷彿させたのだ。

私が小学校低学年の頃から、父は7年間、入退院を繰り返していた。父の代わりに母が働き、私たち5人の子どもたちを育てていた。一緒にお風呂に入っている時も、

「肩まで入りなさい」

「はい、10数えて」

それ以外は黙々と順番に子どもたちの背中を洗い、合間に自分の身体を洗っていたような気がする。そして、その顔はいつも何か考え事をしていた。父の病状、子どもたちの学校のこと、そして明日の家計。頭を抱えたくなる問題をいくつも抱えながら、明日を乗り切ることを考えていたのだろう。

そんな時の母の顔をふと思い出したのだった。母は今は93歳になり、明日の心配はしなくても良くなった。今日の予定すら考えることも、やや難しくなってきた。特に、少し前のことも記憶することが出来なくなり、帰ってきた私の娘に何度も「お帰りなさい」と繰り返し、その度に「さっき言ったよ、おばあちゃん」と言われ、笑っている。

ある日、家族4人で息子の誕生日を祝うために、友人のお寿司屋さんで久々に外食をすることになった。偶然、隣に座っていたオペラ歌手の方が、素晴らしい声で「Tanti auguri a te」（「Happy birthday to you」のイタリア語版です）を歌って下さった。その声量と美しい声に皆、感動して、人見知りの母だったが、満面の笑みで拍手をしていた。

次の日、遅い夕飯を取っていた息子が、私と娘に「そういえば、おばあちゃんが今朝、オレが会社に行く時『昨日は楽しかったわね』って言ってた」。私と娘は、ビックリして「覚えてたんだ、昨日のこと。良かったね」。

何だか3人の間に、妙に幸せな空気が流れた。

明日のことを心配しなくて良くなった母。そして今日の心配も出来なくなった母。けれど、昨日の楽しいことは、まだ覚えていられる。楽しいことをいっぱいしてあげようねと、3人で無言のまま誓い合った。

左から、長男、次女、近所の子、長女。私はだっこされています

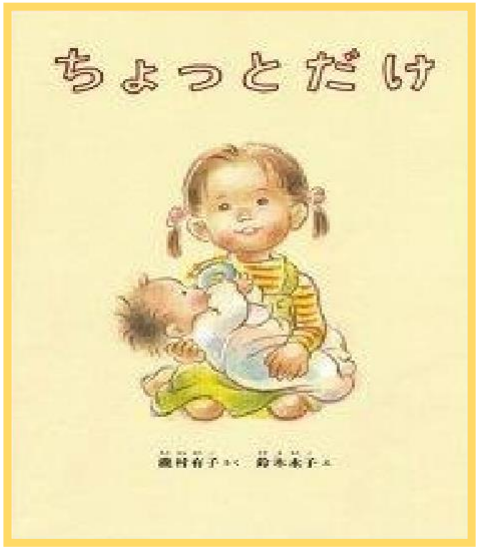
## 楽しかった昨日　また作ろう

115

**余録２　すぐれた絵本　は、世俗　のあかにまみれた、わたしたちの心を きよめてくれる。ときどき、自分自身に読み聞かせよう。**

作・絵：佐野洋子　　出版社：講談社

作：キム・フォップス・オーカソン　出版社：あすなろ書房
絵：エバ・エリクソン　　訳：菱木晃子




滝村有子／さく　鈴木永子／え　出版社／福音館書店

# 文章を書く基本

永杉　徹夫

## （１）なぜ「書けない」「書くことが苦手」なのか

### 他人の目や評価を気にしない

もしも文章への苦手意識が根強いなら、まずこれの心理的克服が大切です。「書けない」という思い込み、これまでに書くためにしてきた苦労をすべて忘れましょう。

書くことに恐怖を感じている人に共通することは、書いたものを誰かに評価してもらうためのものだという思い込みをもっていることです。ことに、学校時代の読書感想文や小論文の訓練がいけません。これらがどれほど「書く」ことのブレーキになっていることか。作文指導をこれまでしてきて一番強く感じるのはこのことです。ただ人に見せるためだけの文、評価してもらうための文を書いてきたことのつまらなさを、まずしっかり認識したいと思います。

ことに自分史は、基本的には自分のために書くものであって、人のためではありません。

自分の生涯を、そのありのままの姿を、そのまま何の着色もせず書き記すものです。

したがって、「見せる」「評価を受ける」ための文章作法から、完全に脱却することを基本姿勢としたいものです。そのための文章術です。そこをまず、しっかり心にとめていただきたいと思います。

ところで、それはわかっていても、どうしても気にしてしまうのが私たちです。具体的な方策を考えて見ましょう。いろんな人が試みている方法は、例えば次のようなものです。

（一）恥も外聞も捨てて、だれにも見せないものとして書いてみる。日記をつけるつもりで書いてみるのも一策。
（二）だれか親しい人に話すつもりで書いてみる。そのときの文体は話し言葉でよい。後で文章体にすればよい。
（三）思いつくままにメモしていく。箇条書きにして余白を残し、あとで肉付けするつもりで気軽に思い浮かぶままに書き記していく（このメモ書き文章術は後章でもややくわしくふれます）。
（四）とにかく、書く環境をこしらえ、そこに自分を置くこと。パソコンならキーを押すだけの状態にして、その前に座ることです。
（五）感興がわかないと書けない人は、それをわかす工夫を。音楽を聴く、映画を観る、本を読む、などは効果的な方法です。なかにはアルコールの助けを借りる人もいます。何がなんでも「書くぞ」という意志さえあれば、これらにふけってしまうことはないはずです。
（六）とにかく書けるところから、あるいは書きたいところから少しずつ書き始めてみる。

以上、一般的なことをあげましたが、人それぞれの方法、儀式があります。それを遠慮なく、むしろ積極的に実行することです。

右のさまざまな方法よりも、じつはもっと大切なことがあります。それはまず、完全主義を捨てるということです。人間のすることに「完全」はありません。何事も初めか

ら完全をめざせば、何も始まらないということは、文章においても同じです。とにかく不完全なまま書き進め、それを後で直していきます。

人生も文章も同じこと、まず人は未完成のまま、とにかく生まれて、それから少しずつ成長してゆきます。文章も、生まれたものを少しずつ修正したり、付け加えたり、削ったりして完成させていきます。これが推敲（すいこう）といわれるものですが（これについては後で考えます)、とにかく不完全なまま書き進めることをモットーに始めることが第一です。

「書くこと」にたいするバリアは、とにかく書き始めることによってなくなっていくものです。「書くこと」の面白さ、楽しさは、だれが何と言おうと「自分のために書く」ことに徹することからしか生まれてこないことを、まず心にとめておいていただきたいと思います。

### それでも大切な文章術

「他人の目を気にしないこと」ということは、内容においてのことであって、表現上は、あくまでも他人を意識しなければなりません。文章は、あらゆる表現も同じことですが、他人にわかってもらってこそ意味があります。たんなる独り言なら、何も文章にしなくてもよいのです。そこをしっかりおさえておきたいと思います。独り言にならないための文章術なのです。

とかく文章術というと、誤解している人が多いようですが、これを、名文を書くための術と考えてはなりません。名文や美文は断じて必要ありません。「名文を書く」ことへの憧れだけは捨てたいものです。「達意」という言葉がありますが、意味がよく通じることが第一であって、人を唸らせるような、いわゆる名文など書く必要はありません。

もし名文というものがあるとすれば、それは達意の文ということです。

名文とは、達意の文のことです。「これは何とうまい文章だろう」と思うことがあります。プロ、アマを問わず、思わずそう唸ってしまう文章はたしかにあります。それは、その人が、言うべきことを実に的確に表現しているからで、文字通り達意の文に私たちは感動するわけです。そういう文を書きたいのです。

そして、何でもそうですが、そのためには文章の基本をしっかり、意識して身につける必要があります。たとえてみれば、文章が家だとすれば、その建築術が文章術であるわけです。

建築術など知らなくても家は建つという人もいるように、文章術など不要という人もいるようです。しかし、住める家を建てるためにはやはり建築術が必要なように、達意の文章を書くためには、文章術はやはり必要です。そして、文章術は自ら生涯にわたり探求し、磨いていくものです。そのための基礎をお話していきます。

## （２）自分史のための文章術について

### 橋本式「下手に書きなさい」

自分史という言葉がはやり、これだけ多くの人が自分史を書くようになったきっかけは、東京八王子在住の橋本義夫氏（故人）の提唱した「ふだん記（ぎ）」が 1975（昭和 50）年頃から急速に普及したことによります。

それはユニークな「万人の文章」のすすめでした。この運動と橋本氏について、ここで詳しく述べるには枚数が足りません。同氏著『だれもが書ける文章』（講談社現代新書、七八年初版）をお読みください。今なお輝きを失わない名著だと思います。

ふだん着や労働着を着るように、民衆みんなが自分の文章を持とう――氏はそう言っ

て万人に文章を書かせる運動を、具体的に粘り強く推し進めました。自分の文章で自らの人生を書き表し、その力強い生き方に誇りを持とう、と人々に呼びかけました。

その文章についての注意は、何と「下手（へた）に書きなさい」でした。上手に書くことは、いわゆる名文を書くことは民衆には不要である。「名文は過去の亡霊だ」とも氏は言いました。

そして各人が、劣等感を捨て、下手なままに自己流に自分史を書くことをすすめました。

橋本氏は身近な自分のことを書いて発表することをすすめました。何を書けばよいかについては、こう言っています。

> 万人の文章は、天下国家とか、世界の大勢といったことはどうでもよい。それよりもまず地方のこと、土地のこと、身のまわりのこと、家のこと、友のこと、学校のこと、思い出、手紙、冠婚葬祭、追悼、近親者や親しかった人たちの小伝、その他旅行記といったものを書くがいい。俳句や短歌のように、材料まで制限しないことだ。
>
> どんなことでも書く習慣をつける。プロ文筆屋の書きそうなものだけが、書く材料であるとくだらぬことを考えぬこと。文章無限。人の書きそうなことは書いたって、それほど意味がない。書きそうもないこと、ありふれたことで、空しく捨てられたものなどはとくによい。

これが自分史についての基本であり、原点です。

## 事実に基づいて書く意味

したがって、私たちが万人の文章によって自分史を書こうとするときに最も大切なことは、「事実に基づいて書く」ということです。

とにかく事実の記録として書くこと、その集積が自分史です。そのためには、「国語辞典、日本史年表、地図帳を用意して、ふだん使っている言葉で、地理的・歴史的に書くことから始めよう」と橋本氏は具体的に教えています。

事実を書くということについては、新聞・雑誌記者などの手法が参考になります。自分に関する事実も、事実で彼らが対象とする事実と何ら変わりはありません。

そして、事実を書くというときに気をつけなければならないのは、「事実まがい」と「事実」を混同しないことです。

ジャーナリストの大先輩のひとり扇谷正造氏は、「らしい事実でなく、まず正確な事実を」と言いました。事実を書くということは、正確さを第一に考えて書くということでもあります。

辞書、年表、地図帳などを身近に置いておく必要性がここにあります。

ここでもうおわかりかと思いますが、自分史の文章とは事実の記録であって、それ以外のものではないということです。ということは、おのずとどんな文章がふさわしいかがわかろうというものです。今まで何気なく読んでいた辞書、年表、地図などの文章が、なかなか優れたものであることもわかってきます。こういう事実に基づいた文章がお手本になります。

さらに言えば、自分史を書く場合に参考になるのは、例えば小中学校や高校で使っている理科や算数・数学の教科書です。国語の教科書よりよほど役に立ちます。

さらに付け加えておくならば、本も理科系の人が書いたものが役立ちます。例えば、物理学者の竹内均さんやロケット博士の糸川英夫さんの本などはたいへん参考になります。古くは寺田寅彦ですが、ほかにも文章の参考になる科学者はたくさんいます。

文章が思うように書けないときは、こういう人のものを読むとよいでしょう。いかに

素直に彼らは達意の文を書いているか。そこから学べる点はいっぱいあります。

### 自分史の構造

自分史だからといって、特別な構造があるわけではありません。

しかし家を建てる前にどんな建築物にするかを考えるように、これから書こうとする自分史をどんなかたちのものにするかを考える必要があります。それはどんな文章で書き始めるかにもつながってくるものです。

じつにさまざまな自分史があります。先に橋本氏があげていたように、自分の身辺のことを含めた歴史をはじめ、これまで書きためてきたもの（散文、韻文を問わず）を、どういうかたちで収めるのか。あるいは誰かの小伝にするのか。いずれにしても、そのおおざっぱなかたちが決まらないと、書き出せません。逆に言えば、その大筋、構造がはっきりすれば、どういう文体で書くかはおおよその見当がついてきます。あとは文章が流れ始めるのを待つだけです。

自分史に一定の枠はありません。むしろ独自の自分史であればあるほど、今までなかった構造、形式、文体になるはずです。いろいろな自分史に目をとおしてみて、自分ならこうするな、という独自のものを見つけていただきたいと思います。

だれでもが作るような類型的自分史なら、作っていても面白くないし、作り甲斐もありません。思いきった構造、形式を考え、それに合った文体で書いてみましょう。

## （３）文章についての基本事項、そのおさらい

### 明晰さとわかりやすさ

読みやすさとは、正確な表現によるものであり、それは明晰に考えられた結果です。

そうでない文章は、読む人に疑問をいだかせたり、いらいらさせたり、混乱させるだけで、とても作者の意図は通じません。ひとつ、参考として藤沢修平の短編をあげてみましょう。「おふく」の冒頭です。

おふくの家の戸が開いたのは、日暮れだった。

家の中から、はじめに客の男、続いておふくの両親、最後に弟の清助の手を引いたおふくが出てきた。

菊坂町のこの裏店（うらだな）には、井戸のそばに胡桃（くるみ）の樹が一本（いっぽん）聳（そび）えている。それは聳えているという形容が似つかわしい大きな木だった。大樹なので、秋に実ってものぼって取るものはいない。大家（おおや）の富田屋喜兵衛は、実をとることをとやかく言わないのだが、実は竿（じっはさお）もとどかない高い枝になった。

ただ秋に大風が吹くと胡桃の実が落ちる。裏店の者たちは、格別争うこともなく、落ちた実を拾い、天日に干したあと皮を捨てて貯える。その頃店賃（ころたなちん）を集めに来た喜兵衛が、少しずつ胡桃をもらい集めて帰ることもあった。この樹があるために、裏店を胡桃長屋と呼ぶ者もいる。

胡桃の樹の下で、造酒蔵（みきぞう）は戸口から出てきたおふくを見ていた。胡桃の樹は、繁りあう葉の間に、房のようなうす緑の花を垂れていた。日射（ひざ）しが弱々しく樹の葉を照らし、その下に立っている造酒蔵の顔は、井戸の上まで伸びた葉の陰になって蒼ざめて見える。

「べつに送ってくることはないさ。万事あたしにまかしてもらえばいい」

客の男の高い声が聞こえた。下卑（げび）た声だと造酒蔵は思った。……

（新潮文庫『暁のひかり』所収）

その場の情景とともに、その周辺と、そこで暮らす人々の様子さえもが、この短い文章から読み取れます。この明晰な描写から、読者はこれから始まろうとする物語がどんな展開をみせるのだろうかと、期待がふくらませてゆきます。

もちろんこれはプロの文章です。だれもがこのように巧みに書けるはずはありません。「下手に書きなさい」とすすめながら、こういう名文を持ち出してくるのは矛盾しているかもしれません。がしかし、これはいわゆる名文ではありません。繰り返しが多かったりする、ごく普通の文章です。それでもなお達意であるところに非凡さがあります。これなどは明晰に考えられて書かれた文の意味はよく伝わる、という証明のような文章です。

## 長文と短文どちらがいいか

長文と短文（センテンスの長短のこと）のどちらがいいか。よく議論されるところですが、やはり短文を心がけるべきでしょう。長いとどうしても読みにくいし、理解しにくくなります。短文を積み重ねていって、あとでここは続けたほうがよいと思ったら、二つあるいは三つの短文をつなげてみるのもよいでしょう。

先の「おふく」を見てみましょう。みな短文です。それをつなげていっています。例えば三段目がそうです。「……一本聳えている。……大きな樹だった。……のぼって取るものはいない」といった具合です。そして最後に「大家の富田屋喜兵衛は、……高い枝になった」とやや長めの説明的文章で締めています。もしこのように書かないと、いくらでも複雑になりかねません。そうなると読者はもうここで読むのをやめてしまうでしょう。プロはそれを知っていますから、簡潔に、しかも説明的に述べることはせずに、短文を積み重ねていくわけです。

## 改行、句読点のことなど

今度は同じ文章の改行の仕方、句読点などを見てみましょう。

改行はひと段落ごとにすると読みやすくなります。したがって簡潔な表現であればあるほど、改行が利いてきます。周平さんの文章は簡潔な表現が多いですから、当然、改行が多く、読みやすく感じます。改行が効果的になされていますから、文章にリズムがあります。そのあたりも学びたいと思います。

段落とは、言うまでもなく文章のひと区切り、セクションのことです。そこで改行すると、読みやすくなります。ですからできるだけ段落ごとに改行を、というのが文章の基本です。しかし、どこからどこまでがひと区切りと考えるかは、なかなかむずかしいところがあります。不必要に改行すると、かえってわかりにくくなることもあります。

改行は、息遣い、タイミングです。ここで改行しようと思うところですればよいのであって、作者が一番よくそこを知っているはずです。しかし、文章をあまり書きなれない人は、とかく改行を怠りがちになりますから、つとめて改行を心がけるとよいでしょう。

次は、句読点ですが、これも多すぎても少なすぎても読みにくくなります。あまり神経質になることはありません。要は、読者が読みやすいように考えて適度に使うことが大切です。

同文章で、例えば四段落目の「格別争うこともなく」と「落ちた実を拾い」と「天日に干したあと皮を捨てて貯える」の間に「、」が打ってあります。これらはなくても通じます。しかし、あったほうが読みいいし、文章の切れやリズムも出てきます。もしこの「、」がなければどうでしょう。何かノッペラボーな感じがします。

仮名と漢字の使い方、その配分についてもここで少し考えておきましょう。

漢字がたくさんある文はどうしても硬く見え、読みにくい感じを与えます。ことに固有名詞などがよく出てくる文は、そうなりがちです。しかし、そのような場合には、形容詞や副詞などはできるだけ仮名にするといった工夫も必要になります。

引用した文章は、漢字をどうしても使わなければならない内容になっていますが、ごつごつした感じがしません。それは一文が短いということに加え、そのような工夫が、無意識でしょうが、してあるからです。例えば「秋に実ってものぼって取るものはいない」の「のぼって」や「もの」がそうです。また「実は竿もとどかない高い枝になった」も、「実は竿も届かない高い枝に生った」とすると、硬い感じになります。

漢字と仮名の配分がいいと、読みやすく親しみやすくなることは事実です。漢字をつかったほうが視覚的にわかりやすいときは、積極的に使います。「胡桃の樹が一本聳えている」という箇所がありますが、作者も書いているように「聳えているという形容が似つかわしい」からこの漢字を敢えて使っているわけです。また、ルビの使い方なども参考になります。

## 「起承転結」について

文章の基本としてよく話にでるのは、「５Ｗ１Ｈ」と「起承転結」です。これについても少しふれておきます。

前者は言うまでもなく、「いつ」「だれが」「どこで」「なにを」「なぜ」「どのように」という要素が欠けてはならないということです。その重要性も今さら述べる必要はないと思います。読者はどれが欠けていても、いらいらします。意味不明に思えてきます。それは、筆者自身はわかっているつもりでも、読者には通じません。したがって、つねに５Ｗ１Ｈを念頭に置いておく必要がありますが、ことに自分史の場合は重視しなければなりません。

起承転結についても、今さら説明の必要はないでしょう。ただ注意したいのは、このことを意識して書くことはかえって筆を鈍らせかねないということです。

よい文章は、論文やエッセイなどそれがどんな種類のものであれ、各章および全体においてそれぞれ起承転結が、きちっとしています。結果的にそうなっているのです。

ですから、結果がそうならば、書くときにこのことを頭の中に入れておくのも悪くはない、というほどに考えておくのがよいと思います。意識的にそうしようとして、かえってうまくいきませんから、頭の隅にいれておくのです。

とは言っても「起承転結を大切に」という教えは、文章技術においてはなかなかすばらしい教えなのです。人はとかく欲張りですので、「転」の部分をまず人に伝えたいと思うあまり、そこから始めようとすることが多いものです。そのときに、いや待てよ、まず「起」、そして「承」を、というふうに書き始めると、肝心の「転」の部分が意外にスムーズに書けるものです。第一、作者もそのほうが楽です。

文章は散歩にでも出るように書き始めるのがコツです。ジョギングだって、始めは何となくゆるゆると走り、次第に汗をかくまでになっていきます。文章もそうでないと、読者のほうもついていけません。そして最後に、「結」の部分を述べておしまいにするわけですが、そこで初めて読者は「なるほど」と思ってくれるわけです。

起承転結のよい例はいろいろありますが、三木露風の名作童謡「赤とんぼ」などは、そのよい例ではないかと思います。あの「十五で姐(ねえ)やは＼嫁に行き＼お里のたよりも＼絶えはてた」という「転」にあたる第三連の見事さです。核心ともいうべきこの連があることによって、「赤とんぼ」は後に長く歌い継がれる名作となった、と言ってもよいでしょう。

自分史の構成も、やはり結果としてそうなると思います。人生の歩みも同じ起承転結です。自分史全体の構成も当然そうなります。起承転結のことを頭に入れながら書いていくことは、やはりきわめて大切です。

## （４）パソコンによる文章術について

### 四つの利点を最大活用する

大多数の人が、パソコンのワープロソフトを使って文章を書く時代になりました。パソコンによる文章は従来のと、どうちがうのか。文章術という点から少し考えてみましょう。

パソコンを使うことによって文章がいとも簡単に綴れるようになったことはたしかです。しかし、ただそれだけではありません。

これまで手書きでは簡単にできなかったことが、自由にできるようになったことに注目したいと思います。そしてそれを最大限に活用したいのです。パソコン利用による最大の利点といえば、まず次の四点をあげることができるでしょう。

一、書くことが手軽にできるようになりました。「文字を書く」ことから「キーを打つ」ことへの移行は、文章への抵抗感を取り除いてくれます。消去はもちろん、書き直し、書き足しなどが自由にできるようになったということは、推敲がより容易になったということでもあります。この利点を十分に活用しない法はありません。

二、辞書、辞典類のほか、インターネットによる情報を同じ画面に呼び出して文章を作れるようになりました。文章はいっそう厚みと、正確さを持つようになりました。文章作成において、これは画期的なことです。積極的に活用したいものです。パソコンの習熟度は、文章の上達と微妙につながっています。書けば書くほど機械に習熟し、習熟すればよりいっそう書きたくなる、という好循環が生まれます。

三、書いたものをすぐにプリントアウトできます。そのことによって、自分の書いた文を客観的に見ることができ、よりいっそう推敲が楽にできるようになりました。画面で自分の書いたものを読むだけでなく、労を惜しまずプリントアウトして、推敲を重ねたいものです。それを書いては捨て、書いては捨て、します。

四、文章の保存ができるほか、書きためた文章を加工したり、順序を入れ替えたり、組み合わせたりが自由にできます。パソコンが、例えばタイプライターなどと本質的にちがう店はここにあります。これらの機能を存分に活用することによって、文章の整理・再編成できます。このことによって、あとどの部分が不足しているかを知ることもできますし、新たに書かなければならない部分も見えてきます。

以上、思いつくままにあげてみましたが、ほかにパソコンによる文章術として最も有効と思われる方法をひとつ紹介しておきましょう。

### メモの「ふくらまし」と「継ぎ書き」

文章術というと必ずでてくるのがカード方式です。これはいわば発想術と文章を同時にうみだそうとする優れた方法ですが、これがワープロになって、いっそう簡単に自由にできるようになりました。カードがそのままパソコンの画面になったと考えればよいのです。

画面を一枚のカードに見立てて、自由にそこに思いついたことをメモし、それをもとに短文を仕上げていけばよいのです。そしてそれがすぐ原稿になっていきます。旧来のカード方式から考えると隔世の感があります。

文章はもとをたどれば、いわば発想・着想メモを加工し、寄せ集めたものです。メモをふくらませたものが文章なのです。これらをカードの上で「ふくらまし」て、それを原稿用紙に文章化してきたのが従来のやり方でしたが、ワープロではその場で原稿に早変わりするわけです。こんなありがたいことはありません。

ですから、「さあ書くぞ」と身構えて、最初から一字一字書いていくのはやめて、とにかく画面にメモしてみる。そのメモは、言葉ひとつでもいいのです。それをひとつの文にし、さらに別のメモによるものを継ぎ足していく。これを「継ぎ書き」とも言いますが、この繰り返しから、ひとつの文章、ひとつの章ができあがります。

ワープロが、この「ふくらまし法」（この言葉は筆者の造語です）と「継ぎ書き法」による文章作成を、よりいっそう容易にしたわけです。

この「ふくらまし」と「継ぎ書き」の方法を十分意識して活用し、文章をどんどん書き、それを原稿として完成させましょう。初めは字詰めや枚数のことは気にかけなくてもかまいません。字詰めや行数などは、後で「ページ設定」によって簡単に調整できるのですから。

## （５）さあ、とにかく書き始めよう！

自分史は記録です。庶民の記録にこそ真の価値がある、と言ったのは先に紹介した橋本義夫氏です。その氏に「記録」と題する次のような短言集があります。

- 記録は、一時の出来事を永遠なるものにする事が出来る。
- 記録は、世の片隅の出来事を、全体のものにする事が出来る。
- 記録は、名も無き人の行為を人類に結びつける事も出来る。
- 記録のみが、消えゆくものを不死のものにする。
- 記録すれば沈黙しない。だから怒りをぶつける必要がない。
- 記録すれば忘れられない。だから同じ。
- 自慢話をくりかえす必要がない。

自分史を書き上げることは、何も過去にかえって昔を懐かしむというだけのことではありません。むしろ、これまでのわが人生を整理し、次の人生のステップを歩み始めるためのもの、将来へ向けての作業でもあるのです。自分史を自らの力で書き上げることの意義はそこにあります。そのことを確信して書き始めましょう。

ここまで、いろいろ述べてきましたが、一冊の本を仕上げるのは、やはり大変なことです。それを短い時間の間にやってしまおうというわけですから、やはりそれなりの覚悟が必要です。それにはまず、書くことです。そして文章をためていかなければなりません。

一冊にするには、文章が、一定分量なければなりません。多すぎるのは削除したり削ったりすればよいのですが、少ないものはどうしようもありません。

初めは、量に満たないことが多く、「一冊になるだろうか」と心配になったりします。そのような人には、「とにかく毎日、少しずつ書きためていってください」と言うほかありません。

さあ、今すぐ書き始めましょう。そのためのよい方法のひとつは、一番、今、自分が書きたいと思うことから書き始めることです。例えばそれが少年少女時代のことなら、それから書きましょう。あるいは最も書いておきたいのが会社員時代の記録、思い出であるというのなら、そのなかの一挿話から書き始めるとよいでしょう。